様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：２８００３
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１８２８１

研究課題名（和文）近現代の比叡山におけるツーリズム空間化による教団システムの変容

研究課題名（英文）Changes in Sacred Sites through Tourism on Mount Hiei in the Modern Era

研究代表者
卯田　卓矢（ウダタクヤ）（UDA, Takuya）

名桜大学・国際学部・上級准教授

研究者番号：２０７８０１５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は主に二つある。第一に、戦前期の延暦寺は鋼索鉄道開業によって参拝者増加という当初の目標を達成したものの、ツーリズム空間化する中で、無断露店の侵入、肉食提供の要望、荘厳さの低下などにさらされ、それらを注視し続ける状況に陥っていたことを明らかにした。第二に、戦後の自動車道建設において、延暦寺関係者が開業前に境内整備計画を構想し、観光収益に基づいた財源確保を目指していたこと、一方でこの計画が観光重視と理解されたことで批判され、中止に追い込まれたことを明らかにした。この研究では比叡山延暦寺を対象として、聖地とツーリズムの複雑な関係性を聖地管理者の視点から初めて通時的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「聖地とツーリズム」に関する先行研究では、自治体や旅行会社、地域住民などの各主体の競合、協調を通じた聖地の構築・変容のプロセスが考察されている。しかし、聖地を取り巻く主体に注目が集まる一方で最大の利害関係者である聖地管理者（教団）に焦点を当てた研究は少ない。ツーリストへの聖地の開放・閉鎖の最終的な決定権をもつのは概して聖地管理者であるため、聖地とツーリズムの関係を理解するには聖地管理者の動向に注視する必要がある。本研究は近現代の比叡山延暦寺を対象に、大正・昭和初期から戦後の長期にわたる両者の関係性を「聖地管理者の視点」から初めて通時的に明らかにした。この点が本研究の学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study has produced two main results. First, the Enryaku-ji Temple in the prewar period saw an increase in the number of tourists due to the steel railroad. However, as a result of its transformation into a tourist attraction, problems arose, such as the presence of street vendors, requests to eat meat, and a decline in the religious atmosphere. Enryaku-ji Temple had to pay attention to them. Second, at the time of the construction of the expressway, the concerned parties envisioned a maintenance plan. The purpose was to secure financial resources based on the revenue from tourism. However, the plan was cancelled because of its strong tourism component. This study of Enryakuji Temple on Mount. Hieizan is the first diachronic clarification of the complex relationship between sacred sites and tourism from the perspective of "cult organization.

研究分野：観光地理学

キーワード：ツーリズム　聖地　比叡山　延暦寺　交通史　観光開発　教団システム　観光地理学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで都市近郊の霊山に注目し、ツーリズム空間化による聖地の変容プロセスを研究してきた。都市近郊の霊山に注目するのは、ツーリズム市場である都市と近接し、ツーリズムとの関わりが長期にわたってみられたこと、隔絶性の強い山岳という地形的条件からツーリズムの影響が平地の聖地より顕著に表出されたことの理由からである。そのなかで、本研究の対象である比叡山延暦寺に対し、初出を含む一次資料の精力的な収集を行い、それに基づいた成果を発表してきた。具体的には、延暦寺とツーリズムの関係の歴史的研究として、鉄道や自動車道の建設による土地利用の変化、来訪者の増加に伴う境内および施設の整備過程などを明らかにした。

しかし、資料の分析を進めるうちにツーリズム空間化は空間的な変化に加えて、教団自体にも大きな影響を与えているのではないかと考えるようになった。換言すれば、「教団運営」という教団にとって最も重要な部分といえる組織構成や経済的基盤、信者との関係にまで影響を与え、聖地がツーリズムに適合するように変化したのではないか。申請者は以上の問題意識に基づき、延暦寺とツーリズムの関係を教団運営の変化に注目ししつつ、通時的に明らかにする研究を開始した。

２．研究の目的

本研究は、近現代の比叡山を対象に、ツーリズム空間化による延暦寺の教団システムの変化の検討を通して、延暦寺とツーリズムの関係を通時的に明らかにすることを目的とする。具体的には、これまでの調査で得られた延暦寺の運営に関する一次資料および本研究期間において収集する資料（図書、ガイドブック、新聞記事、行政文書など）の分析により明らかにする。

３．研究の方法

近現代における延暦寺とツーリズムの関係は交通機関の発達、具体的には戦前期の鋼索鉄道の敷設、戦後期の 2 つの自動車道（比叡山ドライブウェイ、奥比叡ドライブウェイ）の開業によって大きく転換する。本研究はこの 2 つの時期に注目し、具体的な動向を検討する。

第一の時期では、ツーリズム空間化の基盤が形作られたと考えられる戦前期（昭和初期の鋼索鉄道の敷設および周辺の観光開発）における延暦寺とツーリズムの関係を明らかにする。

第二の時期では、現在まで続く「ツーリズム空間」化の契機となった 2 つの自動車道の建設経緯を延暦寺所蔵資料および地元新聞記事、関係雑誌等の資料から多角的に検討する。また、自動車道開業後の延暦寺において重要事項と位置づけられた参拝者誘致活動の実態と「ツーリズム空間」化の関係を考察する。

４．研究成果

以下、研究成果を上記した戦前期と戦後期に分け、順にまとめる。

(1) 鋼索鉄道開業による比叡山の「ツーリズム空間」化と延暦寺

比叡山は 1925 年に京都方面から、1927 年に大津方面から鋼索鉄道が開業し、さらに京都側の山上駅周辺に遊園地や別荘などが建設された。京都方面からの鉄道開業後、延暦寺は一部の参詣者による火の不始末を懸念し、火災の注意を喚起する制札を設置した。この制札は四明ヶ嶽駅から延暦寺へ向かう参道や、山王院、浄土院、大講堂、根本中堂、明王堂などの主要な堂塔付近に 30 基以上設置された。また、延暦寺は山上駅周辺に来訪者が集中し、風紀上の問題が生じたことに対し、京都府知事宛に陳情書を提出した。一方、大津方面からの鋼索鉄道について、延暦寺は開業前に開発規制区域の設定や動線確保を目的とした参道整備などを行った。開業後、規制区域内の無断露店の排除を複数回実施したものの、区域は根本中堂を中心に広大な範囲であったことから取り締まりが行き届かず、その後も多数の露店が侵入した。さらに、無断露店に加えて、食堂からの肉食提供の要望や駕籠屋の休憩所（叡山中堂駅周辺）の設置申請なども相次ぐようになった。また、区域設定は域内における建物規制・排除に主眼が置かれていたが、参拝者の急増と「公園散策」のような新たな参詣者の出現によって延暦寺が本来的に有していた宗教的雰囲気に大きな影響を与えた。

鉄道と社寺に関わる従来の研究では鉄道開業後の俗化の実態、またそれに対する社寺側の対策については十分に検討されていない。特に俗化に関しては、先行研究の多くが参詣者の誘致面に焦点を当てる一方で、鉄道開業による「負のインパクト」にあまり注視してこなかった。本研究は、鋼索鉄道開業後の延暦寺が参詣者の増加に伴い生起した境内をめぐる新たな状況に常時注意を払わなければならなくなったことを実証的に明らかにした点に学術的意義がある。

以上の研究に関わる成果は下記の通りである。

卯田卓矢 2019. 昭和初期の比叡山における観光開発と自然保護－「聖地と自然保護」の関係に注目して－. 名桜大学紀要 = The Meio University bulletin 24. 35-47.
卯田卓矢 印刷中. 鋼索鉄道開業による比叡山の「ツーリズム空間」化と延暦寺. 井田泰人編『鉄

道と社寺参詣』出版年未定.

（2）戦後の比叡山における自動車道開業による空間変容と参拝者誘致活動

①戦後の比叡山における自動車道建設と「比叡山綜合施設計画」

延暦寺は自動車道建設計画に対し、歴史・文化および観光面からの社会的な期待や、新たな財源基盤の構築を理由に承諾した。その後、延暦寺執行の山田恵諦は専門家の協力のもとで「比叡山綜合施設計画」の構想を進めた。「施設計画」は鋼索鉄道開業時に立案されたものとは異なり、開発を重視した計画であった。この背景には諸堂収入を宗教活動の「源泉」とする方針が関係していた。一方で、山田にはこの諸堂収入による財源確保に対し、自動車道の開通のみではその任を果たせないという理解があったとも捉えられた。つまり、山田は自動車道に期待しつつも、交通利便性の向上のみで「源泉」を安定化させるには限界があり、来訪者のさらなる増加の手段として、観光的要素を多分に取り入れた「施設計画」の実現が不可欠であると判断したと推察された。ただ、「施設計画」における方針やその開発基準はあくまで山田が考えたもので、この「施設計画」がたとえ多様な関心をもつ来訪者を誘引するものであったとしても、自動車道建設それ自体を憂慮する者にとっては自動車道に続くさらなる開発と認識され、批判の対象となった。

本研究は以上の経緯から、自動車道は新たな寺院運営の仕組みに目を開かせたと同時に、その取り扱いをめぐって様々な思惑や対立を生起させる存在であったことを明らかにした。

②戦後の比叡山における自動車道開業による空間変容と正当性

延暦寺は自動車道の開業を機にツーリズムを視野に入れた新たな聖地づくりを模索し、様々な事業を進めた。一方、そうした動きは宗内外から「俗的」として懸念されることも少なくない。特にその関係構築のプロセスにおいて従来の聖地のイメージとは大きく異なるような変化が伴えば、反発や批判が増す。そのため、当該の聖地はツーリズムとの関係を状況に応じて軌道修正したり、関係の有効性や正当性を外部に発信したりするなどの対応が求められる。この点は延暦寺も同様であり、特に第二の自動車道計画の公表後には関係者から批判が続出した。延暦寺は自動車道の観光的価値を認識し、来訪者増加の期待から計画を進めたが、その目的はあくまでも教学振興のための財源確保であった。しかし、外部からみれば，たとえ教学振興だったとしても、開発による横川の空間変容自体に変わりはなく、その空間利用の「認識のズレ」から批判が生じた。延暦寺は一連の批判を受けてルートを変更し、霊域保全に最大限考慮する考えを示した。加えて、人材育成に関わる施設を奥比叡ドライブウェイの建設とともに、大法要の記念事業にすることを表明した。この記念事業への位置づけには、ドライブウェイ計画の批判に対し、この計画が延暦寺の重要な法要において、つまりは延暦寺の歴史において重要であること、また人材育成の施設を同時に整備し、記念事業とすることで教学振興のためのドライブウェイという仕組みを宗内外に示す契機となり、それが開発の正当化につながるとの判断があったと推察された。

以上の聖地とツーリズムの複雑な関係構築のプロセスは先行研究で十分に論究されておらず、本研究が示した新たな知見と位置づけられる。

③ツーリズムによる聖地運営システムの構築

本研究は先の 2 つの自動車道開業後の延暦寺を事例に、聖地とツーリズムの関係を「観光媒介」に対する認識や活用のあり方から検討した。延暦寺は奥比叡ドライブウェイ開業後、大規模な境内整備を実施し、受け入れ態勢の充実と「見どころ」の創出および再編を進めた。そして、寺内体制を改編し、専属の部署である参拝部を新設した。参拝部は多様な対象（一般者、修学旅行、信者）・圏域（近隣、遠方）・状況（平時、法要時）に対し、観光媒介を活用した誘致活動を重層的に展開した。その際、延暦寺が連携先として重視した地元観光団体や旅行会社は戦後以降に観光地とツーリストを媒介する存在として重要な役割を担ったが、延暦寺はこうした当時のツーリズムの動向を理解し、各主体と積極的に関わることで参拝者の獲得に結びつけていた。特に旅行会社には利用傾向やクーポン利用率の調査･分析に基づき､働きかけが強められた｡また、会館利用の多くを占める修学旅行生に対してもアンケートを実施し、生徒の関心を把握しようとしていた。さらに、その後設立された協議会では企業 2 社が有するマーケティング能力と企業ネットワークを活用し、デザイン性を重視したパンフレットや関東地方への誘致圏の拡大などが進められた。また、その過程において構築された企業関係が年末年始行事の誘致活動にも取り入れられ、参拝者のさらなる獲得が目指された。

以上の一連のプロセスから、延暦寺は当時の観光媒介を積極的に活用し、誘致活動を実践することで、聖地の継続的運営を果たしていたことを明らかにした。

以上の研究に関わる成果は下記の通りである。

卯田卓矢 2019. 世界遺産斎場御嶽における来訪者の特性とスピリチュアリティ－日本人・外国人来訪者の行動比較を通して－. 地理空間 = Geographical space 11-3. 197-222.［査読有り］

卯田卓矢 2020. ツーリズムによる聖地運営システムの構築－比叡山延暦寺を事例として－. 山中 弘編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂.

芳賀幹大，佐藤大輔，若松 英，王 嘉瑶，馬 詩維，郭 仕瑩，喜馬佳也乃，卯田卓矢，松井圭介 2020. 地方都市における祭礼の維持形態に関する考察－鹿島神宮祭頭祭当番郷を事例に－. 地域研究年報 = Annals of human and regional geography 42. 109-131.

卯田卓矢 2020. 書評 冬月律『過疎地神社の研究－人口減少社会と神社神道－』図書新聞 3437.
卯田卓矢 2021. 戦後の比叡山における自動車道建設と「比叡山綜合施設計画」. 交通史研究 98. 32-53. ［査読有り］
卯田卓矢 2019. 鋼索鉄道開業による延暦寺の「ツーリズム空間」化の諸相. 社会経済史学会近畿部会サマーシンポジウム「鉄道と社寺参詣－地域社会への影響と経済効果－」（大阪市立大学文化交流センター）
卯田卓矢 2019. メディア・ツーリズムの展開と観光ガイドの「語り」－世界遺産斎場御嶽における「パワースポット」の位置づけに注目して－. 2019 年度沖縄地理学会大会（沖縄大学）
卯田卓矢 2022. 戦後の比叡山におけるドライブウェイ開業による空間変容と正当性－宗教イベントとしての大規模法要に注目して－. 2022 年度 第 65 回歴史地理学会大会（滋賀大学大津キャンパス）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 卯田卓矢	４．巻 98
２．論文標題 戦後の比叡山における自動車道建設と「比叡山綜合施設計画」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 交通史研究	６．最初と最後の頁 32-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 卯田卓矢	４．巻 3437
２．論文標題 冬月律『過疎地神社の研究－人口減少社会と神社神道－』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 図書新聞	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 芳賀幹大・佐藤大輔・若松英・王嘉瑶・馬詩維・郭仕瑩・喜馬佳也乃・卯田卓矢・松井圭介	４．巻 42
２．論文標題 地方都市における祭礼の維持形態に関する考察－鹿島神宮祭頭祭当番郷を事例に－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 地域研究年報	６．最初と最後の頁 109-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 卯田卓矢	４．巻 24
２．論文標題 昭和初期の比叡山における観光開発と自然保護－「聖地と自然保護」の関係に注目して－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 名桜大学紀要	６．最初と最後の頁 35‐47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 卯田卓矢	4．巻 11‐3
2．論文標題 世界遺産斎場御嶽における来訪者の特性とスピリチュアリティ－日本人・外国人来訪者の行動比較を通して－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 地理空間	6．最初と最後の頁 197-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24586/jags.11.3_21	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 卯田卓矢
2．発表標題 鋼索鉄道開業による延暦寺の「ツーリズム空間」化の諸相
3．学会等名 社会経済史学会近畿部会サマーシンポジウム「鉄道と社寺参詣－地域社会への影響と経済効果－」（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 卯田卓矢
2．発表標題 メディア・ツーリズムの展開と観光ガイドの「語り」－世界遺産斎場御嶽における「パワースポット」の位置づけに注目して－
3．学会等名 2019年度沖縄地理学会大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 卯田卓矢
2．発表標題 戦後の比叡山におけるドライブウェイ開業による空間変容と正当性－宗教イベントとしての大規模法要に注目して－
3．学会等名 2022年度第65回歴史地理学会大会
4．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

1．著者名 山中弘編	4．発行年 2020年
2．出版社 弘文堂	5．総ページ数 351
3．書名 現代宗教とスピリチュアル・マーケット（ツーリズムによる聖地運営システムの構築－比叡山延暦寺を事例として－）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関